

「〇〇さ～ん、どうぞ」と、診察室の扉を開けて待合室に座っておられる患者さんに声を掛ける。小海診療所では苗字ではなく患者さんのしたの名前を呼ぶことも少なくない。目が合って「はい」と答えてくださるが、なかなか入ってこられないこともある。そんな時は待合室で同窓会が開催されていることがある。小海に生まれて、小海で育って、小海で結婚して、小海で子どもを授かり育て、そして孫ができ、いつの間にか高齢になった80代、90代の方々の久しぶりの再会である。そんな時は、待合室から漏れ聞こえる楽しい声をしばらく聴いて楽しんでしまう。そんな時に、やっぱりついつい思ってしまう。地域に根差した診療所は「ええなあ～」と。



クリスマスの訪問診療（2022年12月、伊豆保健医療センターにて）

診察室に入ってこられた、その80代後半の患者さんに「お知り合いですか？」と尋ねると、「小学校の同級生」とか「中学校の同級生」だったと答えが返ってくる。そんな時は、外来が少し混んでいても、その患者さんのタイムマシンと一緒に乗せてもらい、少し昔話を聞かせてもらったりする。そこで、その方の人生や生きがいや死生観までをたまに教えてもらったりもする。そんな大事な話を自分一人だけの宝物にするわけにはいかないの、今後のその方の疾患に対する治療や急変時の希望など「こころづもり」に関することは、カルテ内に記録させていただいて共有させていただくことにしている。



JICA日系ブラジル人の研修受け入れ（2022年11月、小海分院屋上にて南部地域を背景に）

佐久総合病院（本院）や今私が勤めている伊豆保健医療センターでの外来ではなかなかできないことが、なぜかこの小海診療所ではできる。小海診療所だけでなく、私が今までに勤務をさせていただいた南佐久郡南部の川上村診療所、南牧村出張診療所・野辺山診療所、北相木村診療所、南相木村診療所では、どこでも可能だった。

南部診療所のこの魔法の秘密は何なのか？

おそらくは、診療所が地域に根差していること。そこで働くスタッフも、患者さんのみならずそのご家族にも寄り添って、地域に根差していること。そして医師もそんな環境下だからタイムマシンに乗せてもらう余裕が少し持てることなのではないか。

こんな素敵な空間を、非常勤になっても毎週経験できる幸せに感謝しています。



南部診療所に関わった同世代の3人

（右から長純一医師、由井和也医師、筆者）